

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する一考察（2年次）

島根県教育センター浜田教育センター
研究・研修スタッフ 共同研究

目次

【要 旨】	1
1 研究の背景	1
2 研究の目的	2
3 研究の方法	2
4 研究の内容	2
(1)リーフレット改善のための調査	4
①調査の方法	4
②研修設計（出前講座）	5
③結果と考察	6
(2)具体的方策に対する分かりやすさ、理解しやすさの検証	10
①リーフレットの修正と改善	10
②校内研修による具体的方策（リーフレット）の検証	12
(3)校内研修で使えるリーフレットに向けての修正・改善	16
5 2年次の研究のまとめ	21
6 おわりに	21
【参考・引用文献】	23

※本研究による紀要文中の表現は次のように統一しています。

教 師…教える立場の者

教職員…学校で子どもに関わる者

子ども…特定の校種によらない児童生徒

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する一考察（2年次）

島根県教育センター 浜田教育センター 研究・研修スタッフ 共同研究

【 要 旨 】

本研究は、令和3年度から2カ年計画の研究であり、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（令和3年中央教育審議会答申）」（以下、R3答申）で示された「個別最適な学び」と「協働的な学び」、またその両者の「一体的な充実」の実現に向けた具体的方策の提案を目的としている。

2年次は、本研究テーマをもとにした研修を島根県内の教職員を対象に実施し、研修後に意識調査を行った。その結果、教職経験年数による理解度の差や、内容の解釈に個人差（ばらつき）があるということ等が明らかになった。そこで、1年次に作成したリーフレットに、「分かりやすい語句」「具体的なイメージ」「学校が自走できる」等の視点で改善を重ねた。本研究テーマの実現に向けた具体的方策として、新たにルートマップ（リーフレット）、充(10)実ナビ（補足資料）、研修動画を作成した。

【キーワード：理解度 教職経験年数 学校が自走 具体的な実践イメージ】

1 研究の背景

Well-being*¹。この言葉は令和元年に経済協力開発機構(OECD)が「学びの羅針盤(Learning Compass 2030)」(図1)の中で私達が望む未来の最終的なゴールとして示している。OECDはこの「学びの羅針盤」の中で、子どもたちが2030年以降も活躍するために育んでいく必要のある資質・能力とは何かの検討を行った。R3答申でもこのことについて取り上げ、子どもたちがWell-beingを実現していくために、「自ら主体的に目標を設定し、振り返りながら、責任ある行動がとれる力を身に付けることの重要性」を指摘した。

では、2030年以降の未来をどのように捉えていくのか。白井(2020)は、現在を含めこれからはVUCA*²の時代であると示し、今までに類を見ない少子高齢化の進行、グローバル化、情報化の進展、AIの登場など、将来の変化を予想することが困難な時代が来ると述べている。このような社会の変化や将来の見通しとともに、平成28年に示された中央教育審議会答申(中教審第197号)が示す「学びの地図」とされる学習指導要領(以下、新学習指導要領)が小・中学校で順次実施され、そして令和4年度である本年度は高等学校で本格実施を迎えている。R3答申でも「社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となっている中、子どもたちの資質・能力を確実に育成する必要があり、そのためには、新学習指導要領の着実な実施が重要である」としている。

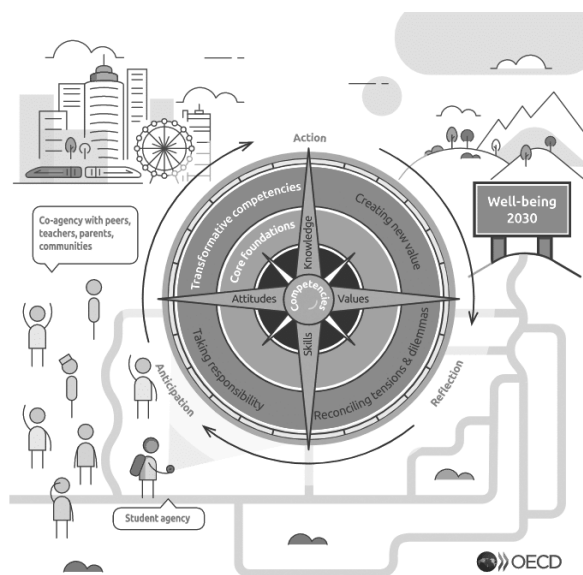


図1 学びの羅針盤“Learning Compass 2030” OECD

*1 OECDは「PISA2015年調査国際結果報告書」において、well-beingを「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な動き(functioning)と潜在能力(capabilities)である」と定義している。

*2 白井(2020)は著書「OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来」の中で、2030年は、よりVUCAな時代になることが予測されるとし、「予測困難で不確実、複雑で曖昧」な時代になるということの意味するものとしてVolatile, Uncertain, Complex, Ambiguousの頭文字をとった言葉を使用している。

さて、令和元年度から始まった GIGA スクール構想によって、本県でも ICT をツールとして積極的且つ効果的に活用していくことが可能となった。同時に、2019 年から今日に至るまで新型コロナウイルス感染症の拡大により、全世界で予測不可能な社会を経験しているところである。この感染症の拡大により、学校現場は臨時休校を余儀なくされ、これをきっかけにオンライン授業のような ICT を利用した新しい学びをスタートさせるなど、この事態への対応が全国の学校で求められることとなる。

このような状況の中で、1 人 1 台タブレット端末等の ICT 環境が整備され、学校では、家庭とオンライン上で接続する、適宜課題を作成し子どもに提供するといった、学びを止めないための多くの努力がなされた。とはいえ、学校からたくさん出された課題を前に、どのように進めてよいのか分からず、教師からの指示を待ち、指示がないと自分だけで学び続けることができないという子どもの状況がみられ、自らの学びを自己調整できない姿が浮き彫りになった。

R 3 答申、及び参考資料*³の中では特に「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の部分が取り上げられている。しかし、学校で「全ての子供たちの可能性を引き出す」ことや、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図ろうとしたとき、学びの具体的なイメージを描くことやどのように授業の中で実践していくのか、などに難しさを感じる教職員も多いことも予想された。そこで、1 年次の研究では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について、文献等の整理を行い、全県への周知を図るための具体的方策としてリーフレットの作成に取り組んだ。

2 年次である本年度は、各学校がその実現に向け自走するためのきっかけとなるような具体的方策を提案したいと考え、先行研究や学校を対象とした調査等を行い、改善に取り組むこととする。

2 研究の目的

本研究は、国の動向、先進校の実践等をもとに、「個別最適な学び」「協働的な学び」そして「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について整理し、学校での実現に向けた具体的方策を提案することを目的としている。

1 年次 文献の整理、情報収集を行い、学びの具体的な姿や方向性を示す手立てとなる方策を検討する。

2 年次 先行研究や学校を対象とした調査を行い、1 年次で検討した方策としてのリーフレットの改善を中心に、学校での実現に向けた具体的方策を提案する。

3 研究の方法

(1) 県内の研究協力校からの意見や先行研究をもとに、リーフレットの改善を行う。

(2) 作成したリーフレットについて、協力校で校内研修を実施してもらい、そのアンケート結果等をもとに、具体的な方策について提案する。

4 研究の内容

本研究の目的は、国の動向、先進校の実践等をもとに、「個別最適な学び」「協働的な学び」そして「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について整理し、学校での実現に向けた具体的方策を提案することである。そこで、1 年次の目的は、文献の整理、情報収集を行い、学びの具体的な姿や方向性を示す手立てとなる方策を検討することとし実施した。ここでは、その結果を表 1 にまとめ、それらを踏まえ 2 年次の方向性や取組を確認する。

* 3 「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」（文部科学省初等中等教育局教育課程課：令和 3 年 3 月、以下「参考資料」）

表1 1年次の整理と2年次の取組の方向性

- 文献等を整理する中で、新学習指導要領で目指している「主体的に学習に取り組む態度」の一側面である「自己調整力」の育成も踏まえつつ、子ども自身が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう、これまで以上に教職員が自身の授業や学習の在り方を「学ぶ側からの視点」で捉え直す必要があることが示唆された。今後は、その学びの具体的な姿を求められた時、端的にその方向性を示す手立て(事例や方策)を提案できるよう、さらなる実践研究が必要であるとする。
- 島根県の教職員(中堅層)を対象とした質問紙調査の結果から、「個別最適な学び」の捉えとして、者によって視点が偏っていたり、その視点ごとの関連性が殆どなかったりする実態があることが明らかになった。
- 先進地域の視察を通して「個別最適な学び」と「協働的な学び」そしてそれらの「一体的な充実」を推進するにあたっての準備、推進方法についての実践事例を得た。また学校視察を通して、それぞれの学校や子どもの実態を踏まえた実践事例を得ることができた。その結果、子どもが学びを自己調整できるようなICT活用が、二つの学びを充実に繋がるのが窺えた。
- 研究成果をもとに、具体的に提案できる方策としてリーフレットの作成に着手することができた。作成プロセスの議論の中で、教科の特性、学校種など多岐にわたる学校現場の実態を考慮に入れると、特に「協働的な学び」についての捉えの共通理解と、より確かな具体的方策を検討していく必要がある。

昨年度の研究成果物として、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する一考察」を動画としてまとめている。この動画を研修等で活用していくことで、「個別最適な学び」「協働的な学び」そして「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」についての理解を図り、それぞれの学校での実現に向けて自走するきっかけとなることを期待した。

動画は音楽・音声・記号・表・イラスト・アニメーション等を用いることで、分かりやすく整理し、視覚的にも記憶に残るよう作成した。令和の日本型学校教育について理解を促すものとなったが、各学校が「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を図っていくための協議や授業改善にはつながりにくい。そのための補助資料として、リーフレットが存在する。つまり、手元のリーフレットを見ながら、「個別最適な学び」「協働的な学び」「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」についての解釈を教職員で共通理解し、実現に向けた協議につなげてほしいと考える。

さらに、リーフレットをもとに協議をする際に、教師が「こんなことができそうだ」「こんなことをやってみよう」と教育課程や授業がイメージできること、且つ、学校がそこに向かって自走する際に、手がかりが示されているものへと修正・改善が必要である。教育センターが、「第〇学年□□科の◇◇◇◇という単元において、このような児童生徒の学びを提供することができます」と、提案することもできる。ただし、それが本当に学校のためになるであろうか。それは学校にとって、提案されたことを“やらされている教育活動”になるのではないか。それぞれの学校がまさに主体



図2 1年次に作成した具体的方策としてのリーフレット

となり、“やってみる”ことで、その学校の児童生徒の学びに寄り沿った教育活動が展開されることが理想である。各校が掲げる教育目標の実現に向けて自走していくために役立つもの、それがリーフレットの中で描かれるべきであると考えた。

そこで今年度は、学校にとって分かりやすく、理解を促すものとなるようリーフレットの修正・改善を中心に研究を進めていく。

(1) リーフレット改善のための調査

本研究で作成するリーフレットは、教職員にとって分かりやすく、且つ理解を促されるものでなければならない。そこで、リーフレットのさらなる改善のため、「R3答申」及び「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について、島根県の教職員がどのように理解し、またその理解にはどのような傾向があるのかを、浜田教育センターが提供する出前講座に申し込んだ学校の教職員を対象（計40名）とし、調査した。ここでは、60分～90分の研修（講義及び協議）を行った後、回答を求める質問紙による調査を行った。

① 調査の方法

調査方法として、表2に示す研修を行った直後に受講者一人一人（計40名）に対して質問紙調査を行った。用いた質問紙は、表2に示す本教育センターが全ての出前講座で行っているものを使用した。質問紙の記述式回答項目③④については、KH Coder（樋口耕一 2020）を用いたテキスト分析を行った。

表2 質問紙調査を行った研修と回答者数

月日	研修講座名（出前講座）	実施場所（対象校）	回答者数 （名）
6月27日	「Well-being な生き方を目指して」 ～個別最適な学びと協働的な学びの 一体的な充実～	吉賀町立柿木小学校	10
9月27日	「Well-being な生き方を目指して」 ～個別最適な学びと協働的な学びの 一体的な充実～	県立隠岐島前高等学校	17
11月28日	「Well-being な生き方を目指して」 ～個別最適な学びと協働的な学びの 一体的な充実～	浜田市立松原小学校	13

表3 質問紙の項目

質問 番号	質問項目	回答項目
①	教職経験年数	・選択式 <input type="checkbox"/> 1～5年目 <input type="checkbox"/> 6～10年目 <input type="checkbox"/> 11～20年目 <input type="checkbox"/> 21年目以上
②	今回の研修講座は満足できるものでしたか	・選択式 <input type="checkbox"/> 満足である <input type="checkbox"/> 概ね満足である <input type="checkbox"/> あまり満足でない <input type="checkbox"/> 満足でない
③	(②で回答した)理由をお書きください	・記述式
④	今回の講座の内容は、今後の教育活動に活用できるものでしたか。どのような場面で活用できそうか、ご記入ください	・記述式

② 研修設計（出前講座）

研修を設計するにあたり、大きく分けて講義・協議の二部構成とした。

前半の講義は、主に「参考資料」に示されている内容を中心に行った。表4に講義内容（概要と項目）を示す。

表4 出前講座の講義内容（概要と項目）

順	内容（項目）
①	時代背景と求められるもの （VUCAの時代、これからの時代に求められる思考力、探求型授業、R3答申）
②	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実についての概要 （R3年浜田教育センター研究・研修スタッフ作成の研修動画の視聴）
③	個別最適な学びの詳細説明 （指導の個別化・学習の個性化の説明と教師の役割）
④	個別最適な学びの想定場面の例 （新しい漢字を学習する場面）
⑤	個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の実現に向けて （「個に応じた指導」と「個別最適な学び」、孤立した学びの危険性、パラダイムシフト）
⑥	先進校の実践事例の紹介…天童市立天童中部小学校 （自学・自習、マイプラン学習、フリースタイルプロジェクト）
⑦	自校での取り組みについての検討 （今後取り入れられそうなこと、実践してみたいこと）

講義は、「導入」→「内容説明（理解）」→「実践事例」→「自校での取り組みの検討」といった流れで設計した。これは、概要的な部分から徐々に具体へ焦点化する流れをつくることで、より理解へとつながると考えたからである。また、講義の途中で短時間の協議（意見交流）の時間を数回設け、アウトプットすることで自己の理解を確認することができるようにした。

導入では、まずは概要を捉えることができるようにした。また、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を理解するうえで、その背景にある「R3答申」や時代背景を捉えておくことは必須であると考えた。そこで、講義の冒頭において、今の時代に求められている力や、そのためにどのような教育が必要なのかがイメージできるようにした。その後、R3年度に浜田教育センター研究・研修スタッフが作成した研修動画を視聴し、「参考資料」に示されている内容を大まかに捉えられるようにした。

内容説明の部分では、個別最適な学びの「指導の個別化」及び「学習の個性化」について焦点化して説明した。これは、R3年度の本研究の調査結果から、県内の教職員は、「協働的な学び」という言葉よりも「個別最適な学び」という言葉の方が聞き馴染みのないことが分かったためである。ここでは、言葉の説明だけでなく学習における想定場面の例を挙げ、より具体的に捉えることができるようにした。

実践事例の部分では、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を、学校の教育活動に実際に取り入れている学校の事例を紹介した。紹介したのは、山形県の天童市立天童中部小学校である。天童中部小の取組の中の、「自学・自習」「マイプラン学習」「フリースタイルプロジェクト」を主として紹介し、それぞれの取組に個別最適な学びや協働的な学び、またその一体的な充実がどのように反映されているのかを説明した。より具体的な情報を提示することで、その後の「自校での取り組みの検討」につなげられるようにした。

後半の協議は、自校での取組につなげるため、「今後取り入れられそうなこと」「実践してみたいこと」のキーワードのもと、個人で考えたり、グループで意見交流したりする活動を行った。協議の様子を図3に示す。また、出前講座の実施校によって、教職員のニーズが異なっていたため、実施校別に協議テーマ及び協議のツールを変えて行った。それぞれの実施校で行った演習の概要を表5に示す。



図3 協議の様子

表5 出前講座の協議の概要

月日	6月27日	9月27日	11月28日
実施校	吉賀町立柿木小学校	隠岐島前高等学校	浜田市立松原小学校
協議テーマ	日常の授業や今後の単元、校内でできそうなこと	明日からできること 今後取り入れられそうなこと	今後取り入れられそうなこと 実践してみたいこと
協議の形	個人思考→グループ協議	個人思考→グループ協議	個人思考→グループ協議
協議に 用いたツール	ワークシート Google Jamboard	ワークシート	ワークシート Microsoft Teams

協議では、新たな知識を獲得したり1つの結論を導いたりするのではなく、あくまでも学校が自走できるきっかけとなることを目的として行った。そのため、テーマに沿って思いつくことをできるだけ多く挙げ、フリーディスカッションの形をとった。また、より多くの意見交換ができるように、個人思考→グループ協議の形をとった後、グループの意見を全体で共有する時間も設けた。その際に、学校の実態に応じたグループウェアやオンラインホワイトボードを用いて共有することができるようにした。

③ 結果と考察

ア 選択式項目の結果と考察（質問番号①②）

質問番号①「教職経験年数」と質問番号②「満足度」の関係性をみるために、図4に教職経験年数ごとに満足度を集計した結果を示す。

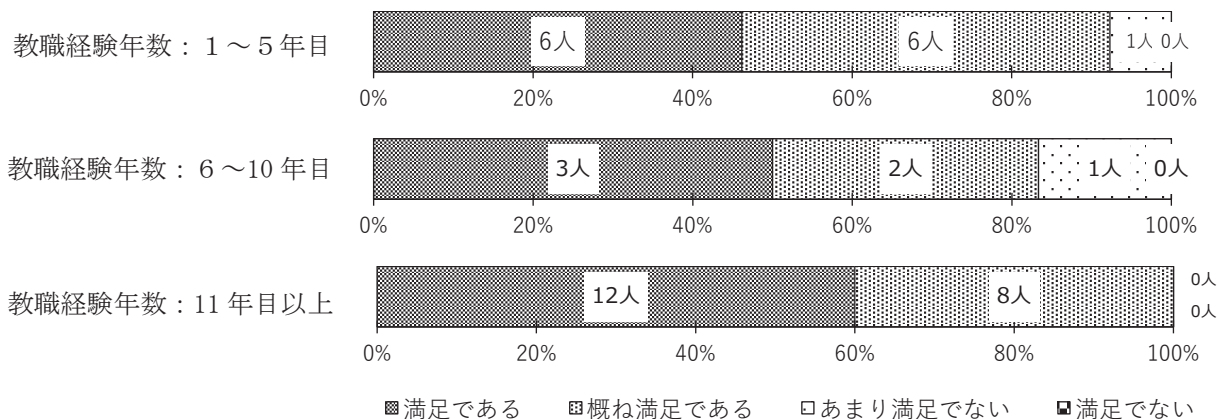


図4 教職経験年数別の満足度（今回の研修講座は満足できるものでしたか）

図4を見ると、教職経験11年目以上の教職員は、全て「満足である」「概ね満足である」といった肯定的回答をしていることが分かる。また、教職経験年数が多くなるにつれて、「満足である」と回答した者の比率が高くなっている。つまり、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という教育の考え方は、教職経験年数の多い者ほど捉えやすく、理解しやすいのではないかと考える。その理由として、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という教育の考え方は、「個別最適な学び」と「個に応じた指導」の関係性で表されるように、既存の教育の考え方をベースとしている部分が大きいため、今までの教職従事経験が理解を大きく支えているのではないかと推察する。

一方、本調査において「あまり満足でない」と回答した2名の者は、その理由として、「正直難しすぎました。」「個別に最適な指導方法はあればあるほどよいが、教員も多ければよいと思う。現行では担当する教員の負担が重くなる一方だと感じた。」と記述していた。これらの回答は、内容理解が難しい点、実践にあたっての困難さを感じた点が、満足度の低さの理由であったのではないかと捉える。

イ 記述式項目の結果と考察（質問番号③）

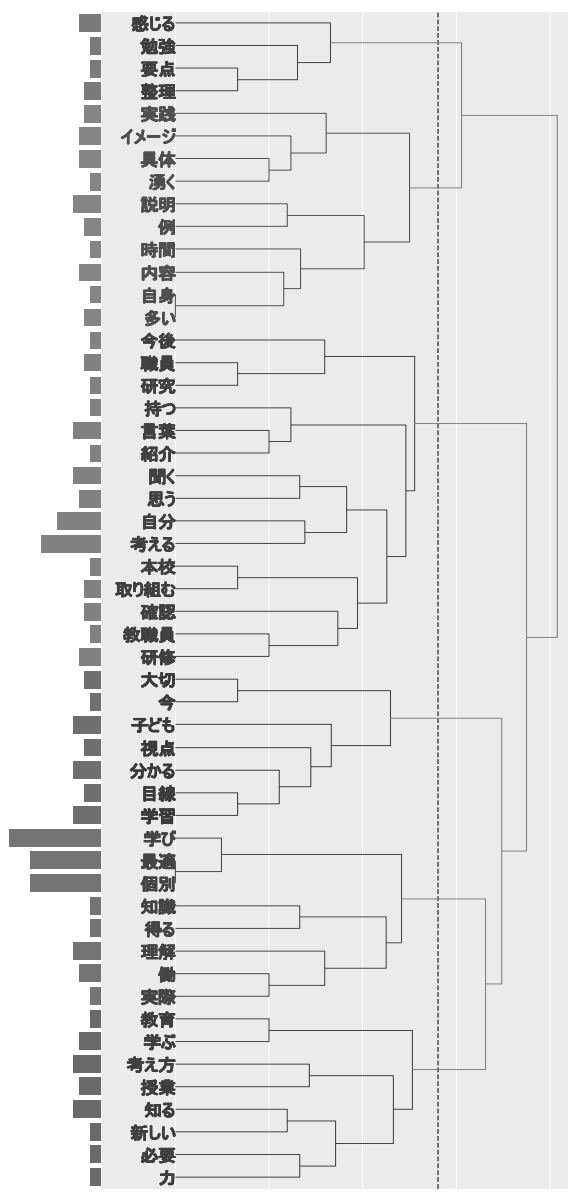


図5 質問番号③のクラスター分析でのデンドログラム

質問番号③「(②で回答した)理由をお書きください」に書かれた記述をKH Coder(樋口耕一2020)を用いてテキスト分析を行った。記述された文章中から語彙を抽出(総数1,062語・使用430語)し、階層的クラスター分析によって回答の傾向をみた。図5に分析結果のデンドログラム(樹形図)を示す。また、分析結果をもとにクラスターごとに抽出語と特徴をまとめたものを表6に示す。

表6 クラスター別の抽出語と特徴

	抽出語	特徴
第1 クラスター	・感じる ・勉強 ・要点 ・整理	要点が整理できた
第2 クラスター	・実践 ・イメージ ・具体 ・湧く ・説明 ・例 ・時間 ・内容 ・自身 ・多い	実践のイメージが湧いた
第3 クラスター	・今後 ・職員 ・研究 ・持つ ・言葉 ・紹介 ・聞く ・思う ・自分 ・考える ・本校 ・取り組む ・確認 ・教職員 ・研修 ・大切 ・今	校内研修や研究で取り組みたい
第4 クラスター	・大切 ・今 ・子ども ・視点 ・分かる ・目線 ・学習	子どもの学習に大切な視点
第5 クラスター	・学び ・知識 ・働 ・実際 ・最適 ・得る ・理解 ・個別	個別最適な学びについての理解
第6 クラスター	・教育 ・授業 ・必要 ・力 ・学ぶ ・知る ・新しい ・考え方	新しい考え方教育として必要

図5のデンドログラム（樹形図）は、語彙同士の関連性を階層状に表したものである。本分析では、点線で示す部分でクラスターを分け、図上部から第1、第2と、第6クラスターまで分けて示した。同じクラスターに分類された語彙は関連が強く、線で結びついている語彙同士も関連が強いことを示している。また、語の左側のグラフは、語の出現数を表している。

表6に示した6つのクラスターの特徴をさらに分類し、大きく3つに分けて満足度の傾向を考察する。1つ目は、第1クラスターの「要点が整理できた」と、第5クラスターの「個別最適な学びについての理解」は、研修の内容面（テーマや示し方）での分かりやすさが満足の理由であると考え。2つ目は、第2クラスターの「実践へのイメージ」と、第3クラスターの「校内研修や研究への意欲」は、今後の職務へ生かそうと思えたことが満足の理由であると考え。3つ目は、第4クラスターの「子どもの学習に大切な視点」と、第6クラスターの「新しい考え方、教育として必要」は、子どもの成長やよりよい教育の追究に必要なだと思えたことが満足の理由であると考え。したがって、「研修（テーマや示し方）の分かりやすさ」や「今後の職務へ生かそうと思えること」「これからの教育として必要だと思えること」が、本研究テーマに係る出前講座の受講満足度を上げる要素であったと推察する。

ウ 記述式項目の結果と考察（質問番号④）

質問番号④「今回の講座の内容は、今後の教育活動に活用できるものでしたか。どのような場面で活用できそうか、ご記入ください」に書かれた記述をKH Coder（樋口耕一 2020）を用いてテキスト分析を行った。記述された文章中から語彙を抽出（総数 1,152 語・使用 462 語）し、出現回数上位 20 位までの語彙を表7に示す。さらに、語彙同士の関係性をみるために、テキスト分析から作成した共起ネットワーク図（KH Coder）を図6に示す。

表7 記述された文章中における出現回数上位 20 位の語彙

位	語彙	出現回数	位	語彙	出現回数
1	授業	19	11	感じる	5
2	思う	16	12	場面	5
3	子ども	14	13	活動	4
4	活用	13	14	個別	4
5	学習	9	15	最適	4
6	学ぶ	8	16	自分	4
7	考える	8	17	主体	4
8	生徒	6	18	任せる	4
9	内容	6	19	方法	4
10	学び	5	20	目指す	4

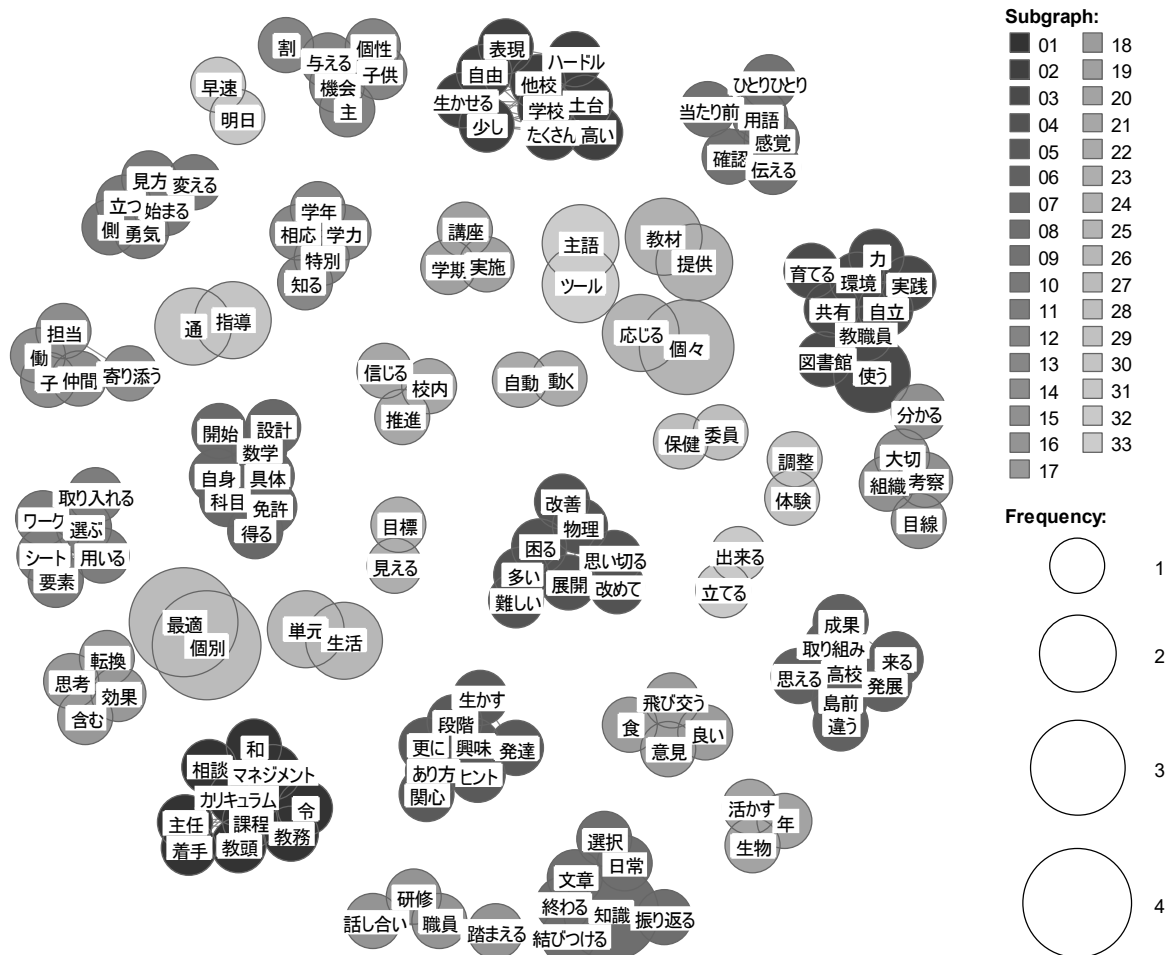


図6 質問番号④の回答に記述された語彙の共起ネットワーク図

図6は、一つ一つの文章で出現する語彙のうち、共起関係（共通に出現）が近いものを近接表示した（線で結んだもの）である。また、円の大きさは出現回数を示し、同じ色の円は距離が近い語彙同士であることを示している。本図は、語彙の最小出現数を1とし、上位100位までの語彙の共起関係を図として出力した。これは、より多くの受講者の少数記述を反映するためにこのように出力したためである。

表7を見ると、「授業」「子ども」「活用」「学習」といった語彙は、他の語彙と比べて出現回数が多いことが分かる。これは、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」が、授業や子どもの学習といった内容を色濃く含んでいるため、このような回答が多かったことは当然の結果だと考える。一方、図6から、より多くの受講者の少数意見に着目してみると、非常に多様な受け止めがあることが分かる。それは、関係性の強いものもあれば、そうでないものもあり、全体的にみるとばらつきが多い状態であると言える。ある受講者が研修後に「個別最適な学びには、オンライン授業が適していると思う」といった発言があった。個別最適な学びには、そのような側面もあるが、それが全てとは言いきれない。この結果から、本研究テーマに係る研修を受けた教職員の解釈には、少なからずばらつきがあるということが明らかになった。

これらの調査結果から、「R3答申」及び「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について、島根県の教職員がどのように理解し、またその理解にはどのような傾向があるのかを調査

した結果と考察をまとめる。

- ・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という教育の考え方は、教職経験年数の多い者ほど捉えやすく、理解しやすい傾向にある。その理由として、今までの教職従事経験が理解を大きく支えていると考える。
- ・出前講座で掲げる「研修（テーマや示し方）の分かりやすさ」や受講者自身が「今後の職務へ生かそうと思えること」「これからの教育として必要だと思えること」が、受講満足度を上げる、つまり理解しやすさの要素であったと推察する。
- ・一方、内容理解が難しい点、実践にあたっての困難さを感じた点が、受講満足度の低さ、つまり理解の困難さの理由であったのではないかと考える。
- ・より多くの受講者の少数意見に着目してみると、非常に多様な受け止めがあることが分かった。本研究テーマに係る研修を受けた教職員の解釈には、少なからずばらつきがあるということが明らかになった。

内容の理解や実践にあたっての困難さについては、新出語句であるためのイメージの捉えにくさと共に、それに伴って具体的な授業構想へのつながりにくさがあることが、要因として考えられる。これらの実態把握から、リーフレットの改善に向けた方向性を、以下に整理する。

- ・分かりやすい語句になるよう改善し、教職従事経験によらない内容とする。
- ・具体的な授業イメージにつながるような内容と提示方法を工夫する。
- ・受け止めにばらつきがあることから、目指す方向性を統一できるような紙面構成する。

また、本出前講座では講義と動画を中心に実施した上での結果であることを踏まえ、講義や動画による伝わりにくさを加味し、後に各自で確認することが可能な紙面の形であるリーフレットを研修資料の主軸として用いる。そして、教職員にとって分かりやすく、且つ理解を促すようなものとなるよう、さらなる改善に取り組む。

(2) 具体的方策に対する分かりやすさ、理解しやすさの検証

① リーフレットの修正と改善

1年次の研究の成果物であるリーフレットは、「個別最適な学びと協働的な学び」の理解と、それらを一体的に充実していくことで表出される子どもの姿をイメージできるように作成した。校内で推進する上で必要な情報をA3資料1枚にまとめ提案したものである。我々が想定している実際の使用場面は、あくまでも「学校」である。本研究で提示した内容を学校全体で行っていくという気運を高めることも踏まえ、職員会等の短時間で研修を実施した場合の活用を想定している。以下にリーフレットの内容及び構成を変遷と共に示す。

ア 提示する内容の整理と構成

図7は1年次に検討したリーフレットである。紙面左側に「個別最適な学び」、右側に「協働的な学び」を位置づけ、それらの一体的に充実を図ることの意味を中央にまとめている。一体的に充実させることを色のグラデーションの変化で位置づけ、視覚的な理解にもつなげている。また、下部には推進のための具体的な手立てとして「10のカード」を示した。各校の重点目標や児童生徒の実態が異なることから、詳細な具体的手段を提示することが、ある種、型にはめた実践を推奨することにつながることを危惧し、きっかけとなるキーワードと概略のみを提示することとした。

イ 「リーフレット」の修正と改善

2年次においては、前述の「出前講座」においてリーフレットの提示を試みている。「出前講座」内で直接触れることはないが、研修後に受講者が各自内容を確認する資料として配付するため、表8の4点を修正し、図8を作成した。

表8 研究1年次リーフレットの修正点

- (ア) 2次元バーコードの添付による研修動画紹介
- (イ) 「個別最適な学び」の簡略化（フキダシや図の挿入）
- (ウ) 「協働的な学び」部分にこれからの教職員の姿を提示
- (エ) 「10のカード」の項目分け提示

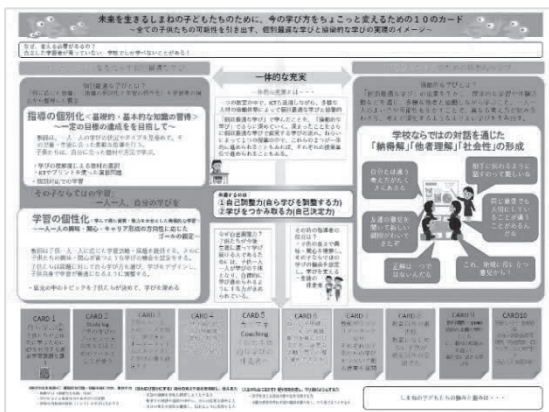


図7 研究1年次リーフレット

(ウ) については、「協働的な学び」についての捉えとして、これまでの教育と同様に、一人一人の意見や考えを共有し批評し合うことで高め合うことのできる教室での学びの重要性も再確認しつつ、教職員の在り方について示唆する内容を加筆した。一斉に知識を注入するだけの指導ではなく、個別最適に学んだ個々の子どもたちの思考が「協働的に」つながり深まりを見せるよう、教職員の姿も別枠で提示している。さらに、(エ)においては、項目を「家庭学習の充実とICT」「学び方のオーダーメイド」「いつでもどこでも授業改善」「先生の底力」「ここならではの教育課程」に大きく括り、手立ての入り口を示すよう加筆し変更している。また、あくまでも「主体的・対話的で深い学び」がゴールであることを強調し、H28答申を踏まえたR3答申であることを明示した。

さらに、西部の小中学校管理職（10名）にもリーフレットについて意見収集している。出前講座同様ここでも、語彙の分かりやすさを求める声が多く上がった。このことを踏まえ、後述する「校内研修」の活用を見据えて検討し、修正を図った。改善内容は表9の3点である。



図8 「出前講座」に向けたリーフレット

表9 図8のリーフレットの修正点

- (オ) 伴走者としての教職員像を強調
- (カ) 「個に応じた指導」の挿入
- (キ) 分かりやすい言葉への変更・提示

(オ) 及び (カ) の変更は、教師の指導観を変えることに焦点を当てている。(オ) は、教育課程や授業の方向性は提示しつつ、そこに向かう教職員の姿を「伴走者」として示すことで、教え込みによる教師主導の授業からの脱却について触れた。(カ) においては、「個に応じた指



図9 「校内研修」に向けたリーフレット

導」は先達より大切にされ続けている視点である。この「個に応じた指導」を「指導の個別化」「学習の個性化」といった子どもの学びから捉え直す視点として、あえて枠組みで示し強調する形に変更している。さらに(キ)では、カードの項目を見直し、できる限り平易な言葉に変更した。

以上のようにいくつかの改編を重ね、最終的に図9を本研究の具体的方策として、次に示す校内研修時に提案した。

② 校内研修による具体的方策（リーフレット）の検証

ア 調査概要

本テーマの実現に向けて各校が自走していくためにも、提示するリーフレットが分かりやすく、且つ理解を促されるものでなければならない。そうでなければ活用されることはない。そこで、表10に示す内容を実施し、受講した教職員に質問紙調査を行った。

表10 リーフレット検証のための校内研修実施概要

実施期間	令和5年1月23日～2月7日		
対象校（人数）	小学校7校（62名）	中学校1校（9名）	計8校（71名） （※Q6～Q7のみ参考 中学校1校（17名））
対象	教諭（養護教諭含む）、事務職員		
時間	約30分		
研修内容	①アンケート記入（Q1～Q3）		
提示資料	・提示スライド ・説明動画 ・リーフレット		
質問紙調査 質問項目	Q1 選択	該当するキャリアステージを○で囲んでください。	
	Q2 選択	「個別最適な学び」という言葉を知っていますか？	
	Q3 記述	「知っている」「やや知っている」と回答された方は、知っていることをご記入ください。	
	Q4 選択	「個別最適な学び」を理解するうえで、特に参考になったものは何ですか？（複数回答可）	
	Q5 記述	参考になった理由をご記入ください。	
	Q6 選択	「個別最適な学び」の考え方を、実践に生かそうと思いませんか？	
	Q7 記述	そう思う理由をご記入ください。	
	Q8 選択	「個別最適な学び」について、ご自身の理解度はどれぐらいだと思いますか？	

我々が想定している実際の使用場面はあくまでも「学校」である。よって、学校全体で行っていくという気運を高めることも踏まえ、校内での職員会等の短い時間での研修を想定した。ここでは、我々が作成した具体的方策としての成果物が、学校現場から見て理解しやすく教育課程の編成や授業に活かせるものとなっているか、いわば“使い心地”を捉えた。なお、対象者が全県対象ではなく校種にも偏りがある調査のため、あくまでも成果物の傾向を掴むためのものとして実施した。

イ 調査結果及び考察

本調査を行った対象となる教職員のキャリアステージ（経験年数）は、図 10 に示す通りであった。

はじめに対象とする受講者の「個別最適な学び」に対する知識の傾向を見る。図 11 を見ると、「個別最適な学び」という言葉については「知っている」「やや知っている」が全体の 76%であり、R3 年答申を受け浸透していることが窺える。

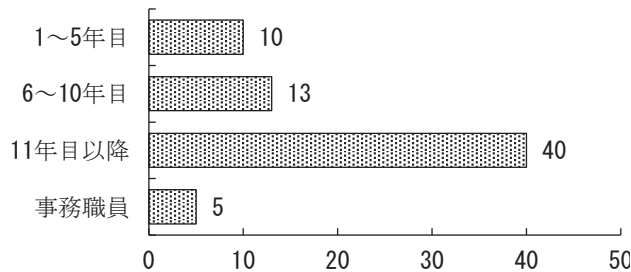


図 10 Q1 該当するキャリアステージ

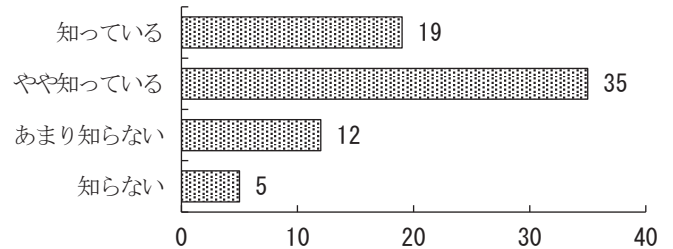


図 11 Q2 「個別最適な学び」という言葉を知っていますか?

次に、この 76%の回答者について、Q3 において書かれた記述を、表 7 同様テキスト分析を行った。ここでの出現頻度は表 11 の通りである。「学び」「一人一人」「応じる」「学ぶ」の出現頻度が多いことから、「一人一人の学びに応じた学習であること」がイメージできていると考える。

表 11 Q3 において記述された文章中における出現回数上位 10 位の語彙（品詞別）

名詞			動詞			形容詞		
位	語彙	出現回数	位	語彙	出現回数	位	語彙	出現回数
1	学び	28	1	応じる	23	1	学びやすい	1
2	一人一人	20	2	学ぶ	20	2	しにくい	1
3	学習	19	3	合う	19	3	大きい	1
4	指導	19	4	いく	15	-	-	-
5	子ども	12	5	合わせる	6	-	-	-
6	児童	9	6	行う	5	-	-	-
7	実態	9	7	考える	5	-	-	-
8	生徒	9	8	示す	3	-	-	-
9	方法	7	9	向かう	3	-	-	-
10	個別	6	10	決める	3	-	-	-

次に、提示した資料のうち何が参考になったかについて、図 12 のような回答結果であった。

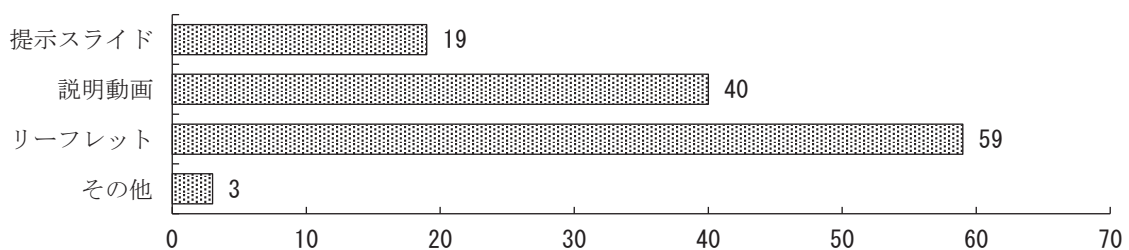


図 12 Q4 「個別最適な学び」を理解する上で、特に参考になったものは何ですか?

本項目については複数回答可としているが、リーフレットを参考資料として取り上げる回答が多かった。Q5の記述から、参考となった理由を抜粋したものを表12に示す。

表12 Q5 理解する上で参考になった資料を選んだ理由（抜粋）

○リーフレットだけでは、理解が難しかったと思うが、動画、スライドがあり理解が深まったため。
○スライドはポイントを絞って提示されていて分かりやすかった。リーフレットは、二つの学びの一体的な充実のイメージをもつのに参考になった。
○説明動画は、具体的な場面を想像でき分かりやすかった。リーフレットはそれぞれの大切なポイントが整理されていてよく分かった。
○スライドも良かったのですが、立ち止まって考えている間に次に進んでいて、分からなくなってしまった。リーフレットだと、分かるまで何度でも読み返しができていてよかった。
○全ての子どもたちを自立した学習者に育てるための視点が10枚のカードで示されており、何から取り組むかが明確だった。

表12に示した一部の記述から見ても、動画やスライドを参考にしつつリーフレットで繰り返し確認できる10枚のカードの提示から授業のイメージ化につながっていることが分かる。一方でリーフレットは情報過多であり理解につながりにくいことも見えてきた。

次に研修実施後に個別最適な学びの考え方、実践に生かす意識について傾向を図13に示す。

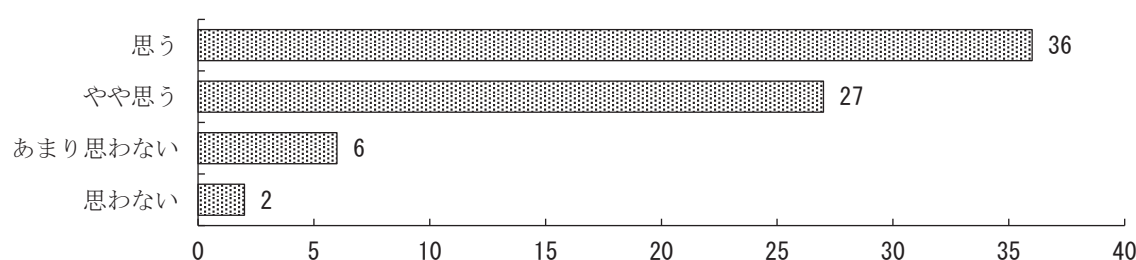


図13 Q6「個別最適な学び」の考え方を、実践に生かそうと思いますか？

図13から肯定的回答が全体の9割を超えていた。また、表13に示すQ7の回答結果（抜粋）から、日々子どもたちと向き合う中で、「個別最適な学び」の必要性を感じていた記述も見られた（表13下線部）。「あまり思わない」「思わない」といった回答者からは、実際に何をどう変えていけばよいのかの難しさや、より具体的な手立ての説明、実感の伴わない用語の出現への戸惑いなどを記述から窺うことができる。

表13 Q7 実践に生かそうと思う理由

Q6の選択結果 (人数)	記述（抜粋）
思う (36)	○これからの時代を生きていく上で必要な力は、授業を変えていくことをしないと育むことができないから。 ○子どもにとって学ぶということが魅力的になると思う。それは、自らが学ぶのだという主体性からくるからだと感じた。
やや思う (27)	○子どもが一人一人違うことを日々感じるようになったので。 ○これからの時代に大切だからというのではなく、「よりよく生きるため」に必要だと納得したので。 ○子どもにはそれぞれ誰にもないようないいところや興味、関心、得意または苦手があり、個にあった学習方法や学習活動で、その子が生き生きとできると思う。 ○実際に担任している児童の困り感をどう解消したらよいか考えているところだった。「複数のやり方から自己決定する」「自分の学びを探究する」という方向性がすばらしいと思った。
あまり 思わない (6)	○理想ではあると思うが、現在の学校のシステム、テスト等の評価、入試システム等を考えると難しい。 ○理論の説明から、では、具体的にどうすればよいのかの説明がほしい。 ○実感の伴わない用語が次々登場してきて、何をどうしていいのかわからない。 ○授業者が個別最適な学びをすすめる上で連携・支援は何か行えると思うが、自分の実践となると普段の業務との距離がまだまだ遠く、ハードルが高い。
思わない(2)	○生かしたいと思うが、今の現状、何から取り組んで取り入れていけばよいのか、正直分からない。

最後に、この校内研修を受け「個別最適な学び」に対する理解度（Q8）の結果と、その回答者が Q4 で回答した参考となった資料との選択結果を表 14 に示す。

表 14 理解度（Q8）と参考となった資料（Q4）の選択結果の関連

理解度（人数）	参考になった資料		
	スライド	動画	リーフレット
十分に理解できた（4）	1	3	4
理解できた（27）	10	17	25
やや理解できた（34）	8	18	26
あまり理解できなかった（5）	0	0	4
理解できなかった（0）	0	0	0
全く理解できなかった（0）	0	0	0

まず、表 14 の肯定的回答数から、多くの受講者の理解が得られたと考えられる。このことから、我々が提示した研修動画やリーフレットに対する「見やすさ」「分かりやすさ」が達成できたと考える。また、いずれの理解度においてもリーフレットを取り上げた頻度が高く、前述した理由も含め「後に確認できるわかりやすい資料の存在」は有意義であると考えられる。

次に、理解度（Q8）とキャリアステージ（Q1）の回答結果の関連を表 15 に示す。

表 15 理解度（Q8）と参考となった資料（Q4）の選択結果の関連（事務職員を除く）

キャリアステージ	理解度					
	十分に理解できた	理解できた	やや理解できた	あまり理解できなかった	理解できなかった	全く理解できなかった
1～5年目	0	4	6	0	0	0
6～10年目	0	8	4	0	0	0
11年目以降	4	14	19	3	0	0

表 15 を見ると、11 年目以降のキャリアステージの回答者にやや否定的な傾向が見られる。中には、Q6 の実践意欲について「ややそう思う」に回答しつつも「教師主導の重要性の方が高いと思う」との記述があり、これまでの実践から大きく舵を切ることへの戸惑いもあることが推察される。しかしながらこの結果は、(1) の出前講座における調査結果である、「教職経験年数の多いものほど捉えやすい」と対立する。「個に応じた指導」は「一人一人に応じた丁寧な指導」としてこれまでも実践してきたことと大きく変わるものではない。この点においては経験豊富な教職員ならば特に重視してきたであろう。だとすれば、今回新たに改善点 (イ) ～ (カ) として示した内容が、ある種の“戸惑い”から実践への生かしにくさにつながったのではないかと考えられる。子どもが主体的に獲得していくように促すオーダーメイドの学びを、今の教育課程において実践していくことへの抵抗、伴走者として提示したことによる新たな教師像の見えにくさが、この結果に反映されたと推察する。これから求められる学校教育には、我々教職員の指導観や学習観の転換が求められる。ある意味、この“戸惑い”とも取れる結果は、転換への方向付けがうまく提示できたと考えられる。

ウ まとめ

以上の調査から、本研究の具体的方策として作成したリーフレットの存在意義を次にまとめる。

- ・ 目指す教育の在り方を自分のペースで見直しながら確認できる。
- ・ 個別最適な学びや協働的な学びを校内で推進していくための、より具体的な実践を提示できる。
- ・ これから求められる学校教育の姿を、授業実践レベルに落とし込んで考えることができる。

我々は、具体的な手立てとして「10のカード」をリーフレットに示した。各校の重点目標や児童生徒の実態が異なることから、あまりにも詳細な具体的手段を提示することが、ある種、型にはめた実践を推奨することにつながることを危惧し、きっかけとなるキーワードを提示することとしている。

ただ、先に述べたようなリーフレットの存在意義は見られるものの、キーワードの捉え方自体が難しく、授業改善の方向にすら意識が向かないことも考えられる。先生方の意欲を高められるよう、具体的なものにしていく必要がある。

しかし、教職員が一人で考えるが故に、何から行えば良いのか迷走してしまうのが実態である。「個」で授業に対応することが多いことも事実であるが、このことは、より一層学校組織としてカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえ取り組んでいくことの必要性も示唆している。ただ、今回10のカードとして提示した内容は全て実施することは想定していない。各学校に委ね、実態に応じた活用につなぎたい。

これらの調査結果を反映させ、各校で活用できるより具体的なリーフレットに修正・改善を図るため、リーフレットの名称を「今の学びをちょこっと変えルートマップ（以下、ルートマップ）、10のカードを「充(10)実ナビゲーション（以下、充(10)実ナビ）」、充(10)実ナビの1枚1枚を「ROUTE」と名付け、提案する。

(3) 校内研修で使えるリーフレットに向けての修正・改善 ～充(10)実ナビゲーション～

(2)で述べたように、本研究の具体的方策を後押しするものとして、より実践を具体化するきっかけになるものを期待する学校のニーズが窺えた。このことから、学校現場で「個別最適な学びと協働的な学びの一定的な充実」についてルートマップを活用して理解を深め、具体的な取り組みを考えるヒントになるものが必要であることが見えてきた。そこでルートマップ下部に示したキーワードを、より具体的な教育実践につながる枠組への落とし込みを行った。

そこで、ルートマップに整理して示した「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について理解を深めてもらうため、キーワードとなる言葉をタイトルとし、実現のヒントとなる10個のカードの作成を行った。また、これを充(10)実ナビゲーションと称した。充(10)実ナビの概要を表16に示す。

表 16 充(10)実ナビゲーションの概要

ROUTE 名	「タイトル」と概要
ROUTE 1	「 ICT を活用して家庭学習の充実を！ 」 子どもたちが主体的に学ぶために効果的に ICT を活用する。 ICT も活用しながら家庭と学校の学びを往還させ、家庭での学びを充実させる。
ROUTE 2	「 子どもの” 学びの足跡” から個別最適な学びへ 」 ICT (Studylog) を活用し、子どもの学びの過程や学び方の特徴を見つめ直し、個別最適な学びの実現に生かす。
ROUTE 3	「 子どもが選択 最適な学び 」 子どもが自分に最適な学びを自己調整できるよう、教師は様々な「学びの選択肢」を豊かに提供する。
ROUTE 4	「 自ら学び、考え行動できる力の育成 」 学習者自らが課題を見つけ、さらに自ら解決する能力を高める学びの場 (例・PBL) を提供する。
ROUTE 5	「 まず挑戦 すぐに修正・改善 AAR サイクル 」 見通し・行動・振り返りのサイクルで、学びの自己調整力を高める
ROUTE 6	「 資質・能力を育成するためにねらいを明確にした授業を！ 」
ROUTE 7	「 これからの教師の役割 」 教師がファシリテーターとなり、それぞれの子どもたちの学びをつないで創る授業を展開する。
ROUTE 8	「 一人一人の可能性を伸ばす多様な学び 」 児童生徒の多様な学びのニーズに対応し、創意工夫を生かした学びが笑顔をつくる。
ROUTE 9	「 STEAM 教育等の教科横断的な学習の推進 」 教科横断的な学習の推進によって、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成する。
ROUTE10	「 多様な学びを広げる宝探しに出かけよう！ 」 宝 (ひと・もの・こと) との連携が学びの協働体制を生み出す。

表 16 に示すとおり、我々は、この ROUTE にある項目をきっかけに、各校が学校教育目標に照らした実践を行うことを期待し、ルートマップに記載する 10 の ROUTE には、簡単な説明のみに留めている。しかしながら学校のニーズは具体的な実践を求めており、提示した項目に寄り添いつつも、各校が自走しながら本研究で提示するめざす姿へ向かうことのできる形を模索する必要があった。この理由により、10 の ROUTE のより一層の具体的な実践に基づき、充(10)実ナビを、個々のカードとして切り出し、補足資料として作成した。我々は、学校が目的地に向かってたどり着くためのきっかけとなる“ナビゲーション”となることを期待し、「充(10)実ナビゲーション」と称し、以下の項目でカードを見直し作成にあたった。

充(10)実ナビの個々のカードの構成を図 14 に、また構成の意図や工夫を表 17 に示す。

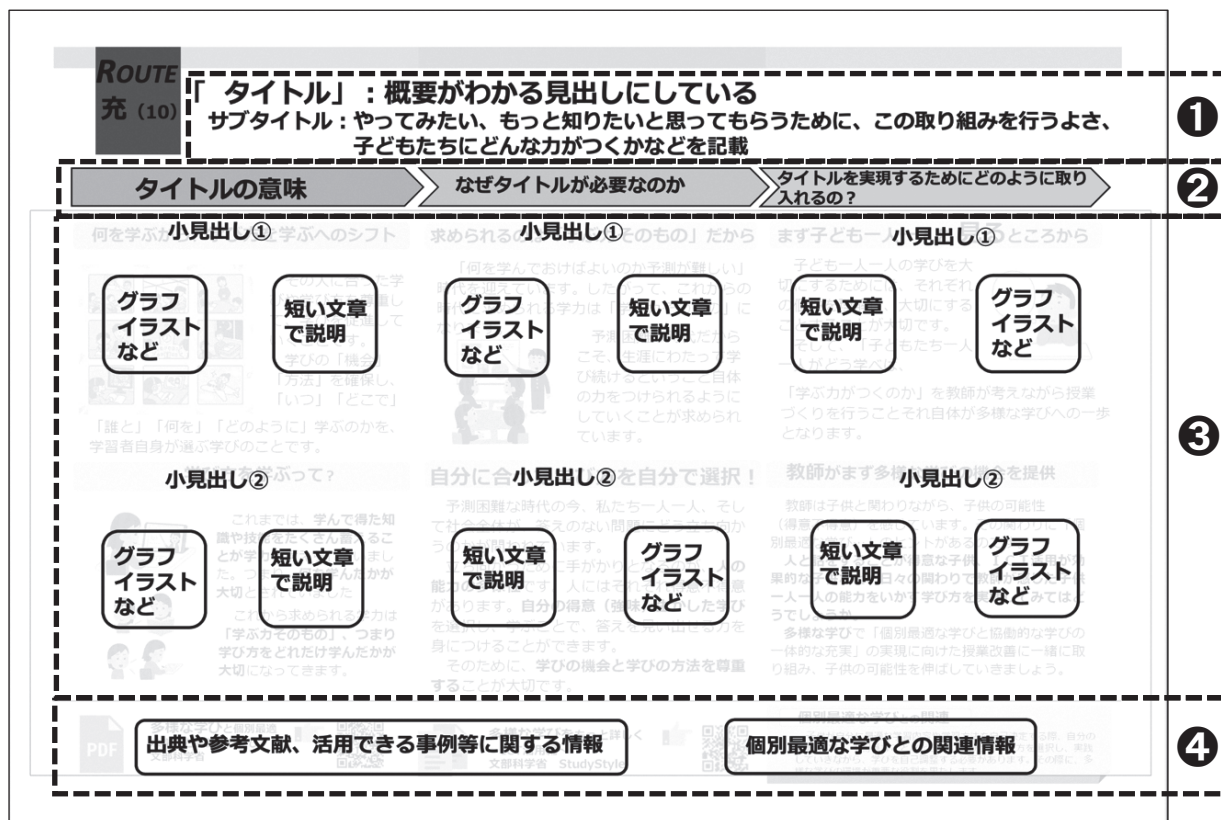


図 14 ROUTE カードの構成

表 17 ROUTE カード構成の意図や工夫

構成部	意図や工夫
①	<ul style="list-style-type: none"> ○タイトルはルートマップにある 10 の ROUTE の見出しとした。短い言葉で、概要が伝わる見出し、惹きつける見出しになるように工夫した。 ○サブタイトルはリーフレットにある 10 の ROUTE の紹介文になるようにした。その取組のよさ、子どもにどんな力がつくかなど、やってみたい、もっと知りたいと思うような工夫をした。
②	<ul style="list-style-type: none"> ○大見出しは横（左から右）に向かって、「何」⇒「なぜ？」⇒「どのように」という流れで作成した。 ○意味を理解し、必要性を感じ、具体的にどう取り組んでいくかを考えながら取り組めるように工夫した。
③	<ul style="list-style-type: none"> ○小見出しは縦（上から下）に向かって、大見出しの内容をグラフやイラストも用いながら、短い文章で説明できる工夫をした。
④	<ul style="list-style-type: none"> ○出典または参考文献の QR コードを示すことで、より深く追求できるように答えられるように工夫した。 ○個別最適な学びとの関連を記載することで、この手立ての有効性や目的が捉えられるようにした。

図 14 及び表 17 に示したことをもとに作成した ROUTE カードを図 15 に示す。これは、ROUTE10「多様な学びを広げる宝探しに出かけよう！」である。また、ROUTE10 の作成意図を表 18 に示す。

ROUTE
10

「多様な学びを広げる宝探しに出かけよう！」

宝（ひと・もの・こと）との連携が学びの協働体制を生み出す

1

連携が学びの協働体制を生み出すとは？

なぜ連携が必要なの？

どのように連携していけば？

「社会に開かれた教育課程」がポイント

少子化高齢化や地域とのつながりの減少などを背景に、学校が抱える課題が複雑化・多様化する中、学校だけではなく、社会全体で子供の育ちを支えることが求められています。「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を学校と社会とが共有し社会と連携・協働しながら「社会に開かれた教育課程」こうすることで外部資源と連携・協働していくことでしか実現できない成果につながってきます。

社会全体で子供の育ちを支えるため

社会のつながりの中で子供たちが学ぶことで、子供たちは、自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感を持つことができます。

このことは、変化の激しい社会において、子供たちが困難を乗り越える未来への希望や力となり、そのために社会と連携・協働の充実がカギとなります。

まずは地域に出かけてみよう！

地域の公民館、まちづくりセンターには、地域の宝（人材、もの、こと）に関する情報がたくさんあります。地域にどんな宝があるのかをまず知るところから、連携・協働が始まっていくかもしれません。

まず、地域に出かけてみるという気持ちで動き出してはどうでしょうか。

「社会に開かれた教育課程」のメリット

子供たちは様々な経験を通して、資質・能力を獲得していきます。良質の教育実践を提供していくために、学校内、外部資源と連携・協働すること前提とした教育課程＝社会に開かれた教育課程を作ります。

こうすることで外部資源と連携・協働していくことでしか実現できない成果につながってきます。

お互いの目標を話し合うことが大切

「こんな子供を育てたい」などお互いの目標を確認することで、**前向きな姿勢**で取り組むことができます。

それぞれが襟を開き、子供の状況や課題について話し合った上で、教育活動に取り組んでいくこと、これが**連携・協働**につながり、**多様な学び**につながってきます。

連携・協働からの計画作成がポイント

これまでは、学校や教師の現状から「できそうな取り組み」から教育計画を作成していたかもしれませんが。今後は、目標となる「資質・能力」を設定し、地域資源と連携・協働を想定しながらこれまでの教育計画を見直したり、改善したりすることで**個別最適な学び・協働的な学び**につながるのではないのでしょうか。

連携・協働をQ&A

「社会に開かれた教育課程」Q&A
EIOS-しまねの教育Web

連携・協働の実践例

地域と学校の連携・協働の推進に向けた参考事例集
(文部科学省)

個別最適な学びとの関連

個別最適な学びは、協働的な学びによって補充されます。地域の教育資源（宝）を再発見し、育てたい子供を共有し、連携していくことで、子供たちにとって多様な学びが広がり、個別最適な学びをより充実したものにしていきます。

図 15 ROUTE10「多様な学びを広げる宝探しに出かけよう！」

表 18 ROUTE10 の作成意図

構成部	意図や工夫
1	○連携して協働体制を生み出していくことが、多様な学びを広げるヒント＝宝（ひと・もの・こと）につながるきっかけとなること、可能性があることを示している。
2	○キーワードとして「連携」を取り上げ、ここでの学びの協働体制を構築する流れを示している。 ○連携を通した学びの協働体制の生成の必要性、さらには連携することの具体的事例、この流れの根拠を学習指導要領に記載してある。
3	○「社会に開かれた教育課程」を進めていくことでのメリットや社会全体で子どもの育ちを支えていくことの必要性和実現していくための手立て、学校ができることを示している。こうすることで、「何を」「なぜ」「どのように」導けばよいか明確になると考えた。
4	○連携して協働体制を生み出すことについて追求できる資料をQRコードで示した。 ○また、連携して協働体制を生み出すことが「個別最適な学び」にどのように関連しているかについて説明を示し、「個別最適な学びと協働的な学びの一定的な充実」に向けた実践につながるように示している。

— 19 —

この充(10)実ナビ作成の目的は、学校が充(10)実ナビを活用して、校内研修等で「個別最適な学び」と「協働的な学び」への手立てを検討することである。さらには、カリキュラム・マネジメントや主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、学校が自走できるためのサポートの役割がある。

この活用場面として次の3点を想定している。

○校内で教育課程等を計画する場面での活用

- ・学校経営方針を決める際の教育課程の編成において
- ・授業づくりを構想する場面において

○出前講座を通じた活用

- ・本研究内容の出前講座を通して、校内で共通理解を図ったり個々に内容を確認したりする場面において

○センター研修後の活用

- ・カリキュラム・マネジメント等、教育課程を検討する際に、自校の方向性を焦点化する場面において

今後、教育センターにおける出前講座においても活用場面を取り入れ、本研究の学校現場における実際の活用を検証する。また、当方が提供する枠組みを用い、学校組織全体で方向性をそろえることは、カリキュラム・マネジメントの視点からも有益だと考える。

5 2年次の研究のまとめ

本研究の目的は、国の動向、先進校の実践等をもとに、「個別最適な学び」「協働的な学び」そして「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について整理し、学校での実現に向けた具体的方策を提案することであった。そして、2年次の目的は、先行研究や学校を対象とした調査を行い、1年次で検討した方策（成果物）を改善し、実現に向けた具体的方策を提案することであった。その結果を以下にまとめる。

- 出前講座による調査結果から、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」という教育の考え方は、教職経験年数の多い者ほど捉えやすく、理解しやすい傾向にあること。また、本研究テーマに係る研修を受けた教職員の解釈には、少なからずばらつきがあるということが明らかになった。
- リーフレット改善に向けた方向性として、「分かりやすい語句になるよう改善し、教職従事経験によらない内容とすること。」「具体的な授業イメージにつながるような工夫すること。」「受け止めにばらつきがあることから、目指す方向性を統一できるような紙面構成すること。」が重要であることが明らかになった。
- 作成した動画やリーフレット（ルートマップ）を用いて、自走のために作成した校内研修プログラムを実施し、アンケートを取った。提示した研修動画やルートマップに対する「見やすさ」「分かりやすさ」に対して肯定的な結果が得られるとともに、特にルートマップについては、「後で確認できる分かりやすい資料の存在」として有効であることが分かった。
- 一方で、より実践を具体化するきっかけになるものを期待する学校のニーズが伺えた。そこで、10のCARDについては、学校の実態に応じて活用できるよう検討を重ね、目的や実践とのつながり等を示した補足資料「充（10）実ナビゲーション」を新たに作成した。

本研究の最終目的である、学校での実現に向けた具体的方策として、研修動画、ルートマップ、充（10）実ナビを作成した。今後は、島根県内各校へ「ルートマップ」及び「充（10）実ナビゲーション」を配付するとともに、島根県教育センターホームページでの情報提供等の情報発信手段を工夫し、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の実現に向けての周知を図りつつ、各学校での実現に向けた自走を促したいと考えている。

6 おわりに

自分の中から「やりたい」と思う内発的動機の誘発は、学びの質を高めるには有効である。このことは、学校に携わる大人であれば、少なからずそう感じているはずである。また、文部科学省も認識しているにもかかわらず、その動機付けがうまくいかないのはなぜだろうか。もしかすると、「子どもはこうあるべき」だから「教育は、指導はこうあるべき」という画一的な指導が何よりも有益で正解だと疑わない意識が邪魔をしているのかもしれない。子ども一人一人の個性や特性に合った手立て（教育）をする、これが第一であるべきだ。

我々の研究で提示した内容は、ともすれば ICT 活用に特化した教育であったり、特別に支援を要する児童生徒にのみ提供する指導であったりと、特定の領域に焦点を当てた教育のようにとらえられがちである。決してそうではない。また、「個別最適な学びか協働的な学びか」のように二項対立で考えるのではなく、両者のどこにバランスを求めると捉えたいのである。結果、最終的に求めるのは「全ての子どもたちが自分自身で幸せをつかみ取ることができるように、今できることを提供できる教育」で

ある。教育の手法は時代によって変えるのが当たり前ののだ。

我々はR2までカリキュラム・マネジメントの一側面である教科横断的な学習について研究を行ってきた。今も「出前講座」として形を変え継続されている。そこでは子どもたちが獲得した学びを、必要な時に自ら引き出し使いこなすことを目指し、指導者が学びを「つなぐ」ことでより深く追及する先生や学校の有様を目指した。「学び」の活用はあくまでも子どもである。このことは、今回着手した本研究内容と同意と捉えてよいのではないだろうか。学びをつかみ取り自分のものとして使うのは子どもである。そのためには我々教師は、大人は、学校は、これまでの以上に子どもの良さに気づき、子ども自身がそれに気づくよう仕掛け、主体的に学びに向かう姿を目指して“伴走”するのである。

(株)ソニー・グローバルエデュケーション会長・磯津政明氏は著書の中で「いまの日本に必要な人材は目の前にある（もしくはまだ見えていない）問題の解決策を自分の頭で考え（または自分で問題を解決し）、解決のため行動に移すことができる主体性を持った人材」だとしている。「考えたい、解決したい」の思いは内発的動機に機縁すると考える。この動機を持つためにも、まずは、子ども一人一人の個性や特性に合った手立て（教育）をすることが必要ではないだろうか。

さて、本研究2年次で実施した校内研修にご協力いただいた先生のアンケート記述から、次のような文章が目にとまった。「子どもたちが多様となっている今、指導に限界を感じている」この言葉はまさに我々の研究を後押しするものだ。先生方は、何かを欲している。だからこそ、求めるのは「大きな変革」だ。できればここで「少しだけの変化」を提案するところだが、覚悟を持って臨む意識こそ、いま私たち教育者にとって必須ではないだろうか。そのことが子どもたちの「内発的動機」の誘発にもつながるはずである。

とはいえ、我々は学校で教職員と子どものことについて時に議論を繰り返す。教室では子どもたちと対話し、その空間を分かち合っている。どんなに教育観が変わろうとも人と人とのつながりが根底にあることを忘れないでいたい。

最後に、本研究を進めるに当たり、ご協力いただいた学校の皆様、1年次の研究に関わった浜田市立旭小学校 三浦教頭、浜田教育事務所 三島指導主事、江津市委員会 泉指導主事には感謝の意を表したい。

なお、本研究は、島根県教育センター浜田教育センター研究・研修スタッフ 澄川由紀、小谷信介、中川貴如、多々納真吾、片岡靖典が共同で行ったものである。

【参考・引用文献】

- ・中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」(答申)
- ・中央教育審議会(2020)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(中間まとめ)
- ・中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(答申)
- ・中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて審議まとめ」
- ・中央教育審議会(2021)「教育課程部会における審議のまとめ」
- ・文部科学省(2017)「小学校学習指導要領」
- ・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領」
- ・文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領」
- ・文部科学省(2021)「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」
- ・文部科学省(2022)「STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進について」
- ・内閣府(2021)「教育・人材育成政策パッケージ策定に向けた中間まとめについて(案)」
- ・内閣府(2022)「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」
- ・経済協力開発機構(2015)「OECDラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」
- ・島根県教育センター浜田教育センター(2011)「学習指導の基本を身に付けよう授業づくりQ&A～『よい授業』を目指して～」
- ・島根県教育センター浜田教育センター(2020)「つなぐ!つなげる!活用する!教科等横断的な学びリーフレット」
- ・島根県教育センター(2022)『令和4年度島根県初任者研修 教育センター研修における「授業づくり」の研修ハンドブック』
- ・西川純(2019)「人生100年時代を生き抜く子を育てる!個別最適化の教育」学陽書房
- ・白井俊(2020)「OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来」ミネルヴァ書房
- ・奈須正裕(2021)「個別最適な学びと協働的な学び」東洋館出版社
- ・奈須正裕(2022)「個別最適な学びの足場を組む」教育開発研究所
- ・浅野大介(2021)「教育DXで『未来の教室』をつくろう」学陽書房
- ・川村一彦(2022)「文・理を融合してリーダーを育てる『STEAM教育』」株式会社幻冬舎
- ・樺島敏郎(2022)「個別最適な学び・協働的な学びを実現する『学びの文脈』」明治図書
- ・磯津政明(2022)「2040教育のミライ」実務教育出版
- ・「新教育ライブラリ PremierⅡ」Vol.1(2021)「特集“School Compass”を創る 未来志向の学校経営」ぎょうせい
- ・「新教育ライブラリ PremierⅡ」Vol.2(2021)「特集 令和の『個別最適な学び・協働的な学び』学びのパラダイムシフト」ぎょうせい
- ・樋口耕一(2020)「社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して-第2版」ナカニシヤ出版
- ・鈴木 寛(2019)「VUCA時代を生き抜くマインドセットは『デバッグ主義』-コエテコマガジン-」GMOメディア株式会社
- ・上越教育大学今日的な教育課題を解決する教職課程検討委員会(2017)「総合的な教師力向上のための調査研究事業実施報告書-今日的な教育課題を解決するためのPBL型授業モデルの構築-(文部科学省委託事業)」上越教育大学
- ・教員人材センター(2022)「教員コラム/PBL(課題解決型学習)とは?特徴や取り入れ方の具体例を解説!」株式会社キャリアビスタ
- ・未来の教育(2022)「プロジェクト型学習/プロジェクト型学習とは?特徴・事例やメリットなどわかりやすく解説!」スタディスタジオ株式会社
- ・みんなの教育技術(2022)「教師の学び/「スタディ・ログ」とは?(麗澤大学准教授・中園長新)」小学館
- ・-エビデンスに基づいた学校教育の改善に向けた実証事業-事業推進委員会(2020)「教育の質の向上に向けたデータ連携・活用の取組-「エビデンスに基づいた学校教育の改善に向けた実証事業」の成果をふまえて-」株式会社内田洋行教育総合研究所